

歴史と歴史教育

坂本 太郎

弘前大学の歴史研究会の十周年の記念の大会が、このように盛大に行なわれ、私もお招きにあずかりまして、話をさせて頂きます事は、大変喜びとし、又光榮とするところであります。主催者はいろいろお考えに存りまして、近世、中世、古代のそれぞれの専門の者をお呼びに呼んだのであります。近世、中世に就きましては、これまでに両先生から、高慶に専門的なお話がありました。(註、豊田武教授「北条氏と東北地方」、小葉田淳教授「江戸時代の貨幣」)。私もそれに倣って、古代に就いて何か専門的なお話をした方が釣り合いが取れるわけでありますが、弘前大学には、虎尾さんと言う古代史の専門家がおりまして、私が話すような事は、大体もう今まで何度か話してあるということでありますので、古代史は止めまして、「歴史と歴史教育」と言う誠に取りとめもない、漠然としに事を掲げたわけであります。しかし、これはよかったと思うのでありまして、何故ならばもう両先生の非常に高度の専門的なお話がありましたので、皆さん大分お疲れになつていたので、今更また古代史の

難しい事をやられたらさぞ迷惑するだろうと思つたからであります。私のする話は取りとめもない話で、極く気楽に、漫談に近いものと思つて聞いて下されば幸いです。さて、歴史と言います。歴史スームと言うのは御承知のように、中央公論社で、『日本の歴史』と言う二十八冊ものシリーズ物を編纂刊行致しております。毎月一冊づつ昨年から出してありますが、これが大変な売れ行きでありまして、一冊にのぞ数十万部出ているのであります。これは普通の小説類でも、一寸真似が出来ないと言つて程の売れ行きであります。ところがこの歴史スームは、昨年初めてではない、実は十年近く前にも、一遍あのたのです。これは読売新聞社で矢張り『日本の歴史』と言うシリーズを出しました。これも又大変な売れ行きであつたのであり、その時に歴史スームと言われたのであります。今回は才二回目の歴史スームであります。こうして見ると、才一波、才二波、そして又才三波が十年も経つたらやめて来るのではないかと、密かに思つております。このように、とにかく昨年の中央公論の『日本

の歴史は、売れ行きが良いのであります。どうしてこんなに売れるのか、お買いになる方は、どう言うおつもりでお買いになつていらっしゃるのか、いちいち伺いを立てて、どう言うおつもりでお買いになりましたか、と言う事で御返事を頂いて統計でも取つたら、面白い結果が出て来ると思うのですが、まだそれはやつていないようです。あります。私は推測致しまするに、御年輩の方は——昔歴史をしかりお受けになつています方は、恐らく、戦後の歴史は大変変わったと言うが、どんなに変わったのだろう、見てやろうと言うような好奇心でお買いになつたのではないか、また若い方は——戦後の歴史教育をお受けになつた方は、学校で教わる歴史はどうも面白くないので、こう言う本を見たらさぞ面白い歴史でも読めるのではまいかと言う期待を持ってお読みになるのではないだろうか、私はこのように推測するのであります。中には——東京のオフィスガールなどは、通勤の途中に一寸小段に控えて行きますと、アクセサリで拾物が宜しいと言うようなことで買う人もあるかと思うのです。これでは一冊あればいいので何冊も買うことはいないのだから、こう言う事はあつても僅かでありましょう。とにかくも、歴史の本がよく売れる事は、一言にして言えれば、日本の人々が歴史好きであると言うことであると思ひます。

明治の経済学者でありました田口鼎軒と言う方は——

この方は、『明治開化小史』と言うものを著わし、又経済雑誌を起して国史大系と言うものを編集、発行し、『群書類従』なども活版にした方がありますが——歴史について大変造詣の深い方であります。この方の論文に「史癖は佳癖である」と言う論文がありました。日本人はともかく歴史好きであると、この田口さんは江戸っ子でありますから、なかなか書いてあることが面白いのですが、市井の人々が銭湯や涼み台で話をする際に話し出すのは歴史の話である。これはしかし、別に高尚な本を読むわけではない、ただ寄席の講談などで得たところの知識そのままである。そう言うものによつて歴史の知識を得てそれをお互に話し合つて喜んでゐる。これは大変良い癖であつて、これによつて日本人の面に対する暖も、つまり日本人の一体感も満足になる。「史癖は佳癖である」という論文では、そう言うことを述べているのであります。正にこれは江戸時代からの歴史好きであることを物語つています。それどころではない、大昔から日本人は歴史好きでありまして、これは御承知のように、日本人が自分の住んでゐる土地について、地名の謂を説明している。いろいろ、これは何天皇が此地にお出でになつて手を洗つたから何という、此地の山に上つて見渡したから何と言うと、ことごとく地名については歴史的由來を述べて、起つた理由を説明しているわけでありまして、こう言う事は矢張り歴史好きと言う事から、いちいち歴

史に結びつけて自分の周囲の土地に就いて考えているわけでありまして、これは太古以来の歴史好きである証であります。

ところが近頃の歴史教は、こう言うものに果して答えて得ているだろうか、私は疑問を抱くわけがあります。尚、歴史フォームに就いては漫談でもいいですが歴史教育とすると少し深刻な問題になって来るので、なかなか難しいのです。歴史教育に就いては、御年輩の方と若い方とでは、全然受け取り方が違ふと思ふんです。御年輩の方、つまり戦前、昭和の初め頃までに義務教育を終つて活躍しておられる方々、もう相當の御年の方々は、今の歴史教育はなっていないと言つて憤慨するのです。先ず、神武天皇の事を知らない、楠木正成、新田義貞などと言う忠臣の事績も知らない、乃木大将、東郷元帥を多技で教わらない、こう言うような歴史は何と言う歴史だ、怪しからんではないか、早くこれを改善してしまかりした歴史にしなさいと言うのです。私は昨年、二回程大伴御年寄りの集まる会合に出て話をしましたが、その際などは聴衆の方々は大変な意見込みでありまして、近頃の歴史教育はなっていない、一体歴史家は何をばやばやしているのか、又文部省も才一怪しからん、私は其処へ出て報告したいに存つて、話の仕様がないので、ほうほうの態で帰つて来ましたが、とにかく年輩の方は、歴史教育はなっていないと言つて憤慨する。ところが若い人に――

戦後に新しい歴史教育を受けられた若人にこう言う話をすると、まるで反対なのです。戦後の歴史教育結構じやないか、何も今更昔のような変な歴史教育に返す事は、折角身にのいた民主的な教育を破壊するものだ、反対の意見だと言つて憤慨する、このように、御年寄りの方と若い人とは、全く逆の方向の考えを持っているのであります。これが歴史教育に対する実情であり、恐らくそれで向違ひないと思ひます。今日御若い方が大衆多いようですが、その方々は、今の歴史教育は悪いから直せなだと言ふ人は余りないと思ひます。そう言うわけでありまして、この問題は大変難しいのです。しかしながらこれはよく考えてみますと、歴史教育にだけ限つた事ではないのです。日本の現状が持つて居るところの悲しむべき矛盾、戦争の残した傷跡であると私は思ひます。今更申すまでもありませんが、政情では、自民党、社会党はお互に常対を、話し合ひは出来ないから掴み合ひをしてみたり、牛歩戦術をやつて見たりする。又日教組と文部省、これも対立する勢力であつて、常に逆である。文部省の言う事はいつも日教組は反対、意見が一致する事は先ずない。何時も反対だ。このように至るところに対立する勢力があり、圓論が分裂しているわけです。意見の統一が出来ない。これは誠に残念な事であると思ひますが、終戦以来全国に広まつて居る現象でありまして、如何ともし難い状態になつておるわけであります。御承知

のように日本の国は終戦後大変な復興を遂けまして、經濟の上に於ては戦前を遙かに凌駕して、世界を驚くような進歩を遂げたのであります。事理想上の向題、今のように向題になりますと、そう言う分裂、相剋が少しも直っていないのでありまして、その点におきましては、戦前の傷跡が大きく残されていると思うわけであります。

そこで、そうだからと言って、これをほうつて置いていいわけではない。何とかして一致点を見出すようにお互に努力すべきであります。何も今日ここで解決策を示そうと言うわけではありませんが、話のついでとして一応歴史教育が明治以来どう言う変遷を辿っているかと言う事を簡単に申し上げる必要があると思うのであります。

明治以来今日まで百年であります。この間を教育の面から見ますと、大体四つの時代に分けられると私は考えます。才一の時代は明治の維新から明治二十年頃までであると思ひます。才二の時代は明治二十年頃から——民権的に申しますと、明治十九年に学校令が出、明治二十三年に教育勅語が出ますのでこの前後——大正を通して昭和十年頃まで、昭和十年前から昭和二十年の終戦までが才三の時代、そして二十年の終戦から今日までが才四の時代であります。このように四つの時代に分けられると思うのであります。

才一の時代と言うのは明治維新が行なわれたばかりであり、何事もまだ整っていない。教育の制度もいろいろ

新しいものを求めて、骨折っていた時代でありまして、突飛な事なども行なわれていたのであります。詳しく申し上げる必要もないかと思うのであります。思潮としては、何でも西洋の文物を取り入れて、古いものは捨て去ろうとしていた時代であります。歴史教育なども余り整つてはいないのでありまして、昔風の漢文の国史の教科書があるかと思うと、又翻譯風の万国史を用いると言うような事で、歴史教育の面から見ますと、殆ど取り立てて言う程の事ではないと思うのであります。ところが才二の時代に存りますと、歴史教育は一躍教育の中で、非常に重要な地位を占めるようになりますのであります。

明治十九年、文部大臣森有礼によりまして、学校令と言う画期的な法令が出されました。これは、帝國大学令、中学校令、師範学校令、小学校令などいろいろな学校令の形で出ました。總括して学校令と呼んでいますが、この学校令におきましては、徹底した國家主義的教育を行なうことになったのであります。國家の根柢に在する學と言ふものが教えられたわけです。國家根柢の人物もここで養うわけでありまして、二十三年には、教育勅語が出されています。ここに於て根本方針が定まつたのであります。國體觀念と儒教倫理、この二本の柱の上によりて、國體を擁護した忠良な國民を養成することが目的とされたのであります。教育勅語では國體の精華と言ふ事を語っていますが、これは日本歴史の事實の上から求めら

れるものであつたわけでありす。ですから日本歴史の授業は、国体を教えるべきものであると言う重い任務が課せられました。そして国民教育の基本になつたわけでありす。この時代の国家主義的な教育に対して、戦後の若い人たちは、大変これが偏向であるかの如くに言う人もありますが、私はそうは思わないのです。この時代の歴史教育はそんなに偏狭なものではない。後のような独善、偏狭なものであつたのではない。当時新しく興るべき国として、国際場裡に活躍して行くためには、最も適切な教育であつたと思うのであります。明治の輝かしい国民の進展は正にこのような国民教育の成果に負う事が非常に多かったと思つてあります。そして国体觀念を基礎に、熱心に教えたのであります。が、学向研究を必ずしも制約したわけではないのであり、当時学者は、学者として研究する歴史は、純正史学である、小学校、中学校で教えるような歴史は、応用史学であるとして、はつきり區別したわけでありまして、学者は充分に研究して宜しい、唯、学校で児童に教える歴史は、自ら発達段階に依じて斟酌をすべきものがある、と言う事は言つておりますけれども、学向研究は決して、これによつて歪められていたわけではないのであります。これが後に誤解がありますように、例えはよく引き合いに出される津田左右吉博士の古代史研究などが、正当な学向が弾圧されたに非常な良い例として引かれるのですが、津田博士が

弾圧されたのは、後の時代であつて、この才二の時代に於ては、津田博士の研究は、立派な著書として、何回も何回も、幾冊も幾冊も刊行されておりました、何等行政処分を受けるとか、非難されるとか言うことがなかつたわけでありす。学向的には異論はあつても、これに対して学向外の力を加える事はなかつたのであります。同じような事は南北朝問題が教科書問題について起りました、その結果これが政治問題となりましたために、明治天皇の勅裁を仰いで、南朝が正当である、北朝は準当であることを決定したのです。従つて、小学校などでは、南朝、北朝と言わないで、吉野の朝廷と言つ事にして教えたのです。けれども学向上では、南朝、北朝と自由に使つてはたわけでありまして、東京大学の史料編纂所で刊行しております『大日本史料』は、この南朝、北朝のところは、あくまで南朝、北朝全く併立の形で表わされていまして何等文句を受けていたかのたのであります。このように、学向研究は、その制約は受けていなかったものであります。でありますから、小学校、中学校では勿論、神武天皇紀元を東事として教えていますし、神代の物語から話を始めていますが、高等学校（旧制）では、もつと学向研究の結果をそのまま教えておりますから、神武紀元は、東年代とは違つて、これはこう言う理由によつてこのようになつたと言う事も教えられるべきです、神代の事は、神話として解釈出来るようにしてあつたわけです。

このように、そう大して、この時代の歴史教育は國家主義的であることは強く通つてはいましたけれども、そう獨善であり、偏向であつたとは肥わらないのです。ところが才三の時代になりますと、大変可笑しくなつて來ます。才三の時代と言うのは、軍部が大陸に進むと言う事を始めた時期でありまして、これが段々と深及に入りまして、收拾がなくなると、國體明徴運動と言うものが起りまして、これによつて自由主義的な人々が弾圧されるようになる。文部省でも『國體の本義』と言ういかめしい本を出して、神話が事實であつたかの如くに教えるようになったわけがあります。この時代になりますと、正に偏向でありまして、歴史教育も日本の國は神國である、神の誓ひに國であり、神の護る國であると言う事を強調したのであります。日本のものは何でも宜しい、西洋のものは皆駄目だと言う変な日本中心主義を無理矢理に言い出したわけでありまして、昭和十六年から小學校が國民學校となりまして、その中心の教育は國民科となり、その國民科の中には、修身、國語、歴史、地理の四つがあるわけですが、そして皇國の民を鍊成するのと、いかめしい事を言つてはわけでありまして、この時期の歴史教育は全く獨善であり偏向でありました。これは全く病的な現象であつたわけでありまして、これが、昭和二十年の無條件降伏によりまして、一転して、才四の時代、終戦から今までは、皆様御承知の通り、占領軍の占領政策

と致しまして、日本國民の強力な愛國心や武勇などにこりこりして、日本には二度とこう言う事をさせてはならない、その基は歴史教育であると言うようになつたのであります。初めの頃は、修身、歴史、地理の授業は停止すると言う事になりました。又、教科書の悪いところは、墨を塗つて使えということもありました。その後しばらくして、元の教科書を全部回収すると言うことにもなりました。又一方では、文部省に命じて、『國の歩み』と言う歴史の教科書を新に編纂させて、それを使わせ、一方では民主主義を根本にした憲法が出来ましたし、教育基本法、學校教育法などの新法令が次々に出て參りました。六、三、三制の新學制も敷かれると言う教育改革が全國的に行われました。歴史も新しい教科になりました。社会科と言うものの中に入れられ、その社会科歴史は、今日に到るまで続いておるのであります。そして社会科は、民主主義を推し広める教育の花形となつたのであります。子供に社会生活をよく理解させる、或は、社会に關する問題について、科學的合理的に研究して自主的に解決して行こうとする態度や能力を養うとか、大変崇高な理想を掲げる事になつたのです。このような状況にあるので、歴史の見方も大きく変りまして、人物などに主眼を置くより、國民全体の基盤である社会や經濟に重きを置くようになったわけですが、

歴史を動かす力は、經濟の力である、經濟が變つて行

って歴史が変わるのである、民衆の力によって歴史は変わるものである、英雄、偉人などと言うのは——個人の力などは物の数ではない、社会経済の大きな流れに比すると、これは、はかばかしいたかたの如きものである、と言うような見方が根本になつてゐるのであります。そして又一つは、日本は今まで外国よりもいい事はかりだと書いたのが逆に成つて、更に日本は耻かしい事ばかりしたんだから、この際、全世界に罪を謝しなければならんと言うような反省と自責の念を基礎にしたような歴史の見方が行なわれる事になつたわけであり、今一つは、こう言う事もありました。今までの歴史は嘘を教へておつた、偽りを教へておつた、それは先程私が応用史學と申し上げたものの事なんです、これを懸く言へば、嘘を教へた、神武天皇即位の年を實際の年であるかの如くに教へたのは、嘘である、或は、神代の物語をそのまま教へたのは、嘘である、と言う反省があるわけであり、戦後の歴史は敢て客観的に書けるわけであり、戦後の成果をそのまま教へなければならん、と言うわけで神武天皇の紀元はもとより、その存在などもほとんど教へない。伝説なども一切歴史から排除すると言うようになつたわけであり、そこで天照大神などと言うのも、これを見ても生徒は読めない、テン、テル、タイ、ジンなどと読むと言う状態になつたわけであり、これは正に前に申しました才三の時代の反動でありまして、それまで

高い価値の置かれたものが、少しの価値もないものになる。これまで無視されたものが急に高い価値を持つようになる。終戦を境とする価値の逆転の著しい例なのであります。しかしながら私は、戦時中の歴史が正に偏向でありましたが、戦後のそれも、戦時中の反動であります。故に、矢張り偏向であると思ふのであります。全ての歴史の動きと言うのは、大きな振子の動きのようなものでありまして、常に幾らかづつ左右に揺れつつほぼ正常に進んで行くものであります、時によって大きな力が加わつて、一方に強く傾きます時は、やがてその逆の動きが起こりまして、また逆方向に強く傾くのです。そして、そう言うものが何度か繰り返して行くうちに、自然とその振幅が弱まって正常なところに落ち着くのであらうと見るわけです。これは長い歴史を通じて見て、そう言う事が言えるのであります。又、今度の戦後のそう言う歴史の兎方も戦時中の反動であります。揺り返してありますから、又その揺り返しが起つて来て、段々と右の方に引張つて行くと言う力が起こつて来るのは当然であらうと思ふわけであり、しかしながら、一部の進歩的文化人などは、これを絶対に容認出来ないと云つて主張するので、これは反動だ、民主主義の逆方向であると言つて罵るものであります、私はどうもこれは、矢張り段々と戻つて行くと言うのは歴史の自然の成り行きであらうと考へるわけであり、以上のように、歴史教

育の歴史を眺めて行くと、そう言う事が言えるのであります。そこで然らば、具体的にどう言う風に今後の歴史教育を考えるかと言う私の考えを極く簡単に述べたいと思います。

戦後の歴史教育、勿論良いところもありますから、良いところは残して置いて、悪いところは直して行く、これは当然の事であります。そして勿論明治時代と今日では時代が違い、明治憲法下の時代ではありません。今日では民主憲法の時代、或は平和主義の憲法の時代でありますから、あくまでそれは民主主義、平和主義の根本は守って行かなければならぬ。これは当然の事でありまして、これを崩してはなるまいと思いますが、その根本に立つた上でその歴史教育の行き過ぎは、矢張り是正して行くべきものと思います。今私の気づくところは大体三つの点でありますが、一つは社会科学と言うものの中に歴史が入っています為、どうしても社会科学と言うものの制約を受けまして、歴史の見方が一方的に与るわけであります。社会の動きと言う面からだけ歴史を見ると言う事になります。人間の働きと言うものがおろそかになる。社会の動きを全然見ないわけではありません。人間は矢張り社会的生物でありますから、社会なしに生きられぬ事は当然であります。けれども、社会に眼を向けると同時に人間の内面にも、人間そのものにも良く眼を向けなければならない、両方を適度に眺めて行かなければなりません。

せん。中庸を得なければならぬと思うわけであります。歴史は社会、経済の動きに勿論左右されており、けれども、しかしその中で人間は自由な意志を持って行動しているわけでありまして、自由意志を持った人間が歴史を創るのでありますから、そう言う人間の力を常に重く見る必要が、今日現在よりも重く見る必要があろうと思います。歴史小説というものが盛んに書かれて、吉川英治を始めとして、いろいろな作家が次から次へと、よくもいろいろな題を持って来るものと思つて、感心しますが、何故売れるか、読まれるかと言うと、これは矢張り人物を思ふ存分活躍させるからであると思ひます。今の人と同じように、昔の人も恋に泣き金儲けして喜ぶわけですから、そう言う事が今の人の心にぴたり来るわけです。そう言うものがない歴史は砂をかむような歴史であります。人に諒えるものがありません。社会科学歴史はどうかと言うと、そう言う砂をかむような、社会の動きにばかり照準を当てた面白くない歴史である。勿論、小説と歴史とは違いますが、小説のように面白くする必要はありませんが、少なくとも、人物に対する深い同情と理解とを盛り込んた歴史でないと人の共鳴は得られないと私は思ふのであります。その点を先ず才一に改善する必要がある、外にはばかり眼を向けている歴史では無い、人間のうちを考える歴史であつてほしいと思ふわけであります。それから才二は学問的と言うことであります。

す。正史は学向の成果を織り込んで学向的でなければならぬと言うのですが、これは議論としては、誠に宜しいのですが、實際には、なかなか難しいものなのです。才一、正史学の成果と言うのが、そんなに絶対的な真とはあり得ないのです。正史の見方と言うのは、人によってかなり違って来ます。でありますから、学向的成果と言つてもなかなか絶対不動のものは出せない。例へば、大さな問題を言いますと、戦後有名になつた邪馬台国について九州にあるのか、畿内にあるのか、今に学者は論争を繰り返していて、解決出来ないのです。そう言う類のものは、沢山あるわけでありまして、そう簡単には言えない、又正史学の成果は、年令のかなり進んだ、高等学校あたりでは宜しいであります。例へば、簡単な言語の訓め方にしても、古代の最初に出た貨幣、和銅開元については、私は当然「ワドウカイエン」と訓むべきであると考へますが、これを「ワドウカイホウ」と訓む人があつて、今に面説相譲らないのです。高等学校位ならば、言語の左右にルビをつけて、つまり「ちん」と「ほう」の両方をつけても納得するでしょうが、小学校、中学校までにもこれは学向上で二説あると言つてもどうもぴんと来ない、矢張り子供は、どちらかに決めようとする、今の学向的成果と言うものがぐらぐらするので、なかなか先生方は、良心的に苦しまれるだろうと思つのです。特に学向的と言う事で向題になるのは、戦

後神話を捨て、伝説を捨てたと言う事があります。神話を捨て、伝説を捨てるのが学向的であると言ふ考え方が戦後支配的ですが、これはそもそも向盡つていたのであります。神話は勿論正史事實ではない、正史事實ではないけれども、古代人が國の始まりについて、天地の始めに就いて考へた正史であります。古代人が考へたと言う事は、厳然たる事實でありまして、この事は、大事な事なのです。しかも神話が後世に強い影響を及ぼしたものですから、これを捨てて置くべきものではない、正史ではないからと言つて正史で教えないと言ふものではない、矢張り教えるべきなのです。どう言う風に教えるかは、勿論いろいろ研究の仕方はありますが、今日では、無土器文化、縄文文化、弥生文化と言うような考古学的年代統によつて先ず國の始まりを解く事が普通になつていますから、これを崩す必要はない、崩す必要はないが、古代人が考へた國の成り立ちに就いても事實はこうであると言ふ事によつて教える必要があると思ふんです。そうすれば、天照大神をテンテルマイジンと言うような事は無いと思ひます。それから伝説ですけれども、神武天皇は伝説である、伝説史上の人物であるからと言って、抹殺する人もあります。紀元だけの向題でなくて、神武天皇そのものも、これを架空の人物であると言ふ人もありますけれども、これなどもそう簡単には断定出来ない。近頃の研究では、神武天皇説話に現われたような人物が、九

州方面からずりと東に渡って幾内に居を占めたと言うよう
な事が考えられると言う説がかなり有力になつて来て
おりますので、神武天皇の東征の説話も、この中に証
史的事実を含んでいる、核心として歴史的事実を含んで
いると考えていいと思います。ですから、伝説であるか
らと言つて、捨てるべきものではない、特に小學校の低
学年に於ては、こう言う面白い話は、面白い話として、
教えるべきものであると私は思うのです。私は、或る雅
詠に、子供には子供の歴史をと言う植筆見たいなものを
書きました。つまり、今日テバートに行けば、御子様
ランチがある、テレビを見れば、子供のニュースがある。
そう言う風に、子供尊重の精神が行き渡っている日本の
国で、子供の歴史がないと言うのは、片手落ちではないか、
小學校の歴史が、社会科の歴史ではどうも仕様がな
い。つまり、社会科の歴史と言うのは、大体的害によつて動
く人間の行動を主としていて、そう言うのは、子供には
全然夢を持たせない、子供は、夢を持てるような面白い
歴史がほしいのじゃないか、それには、伝説などは充分
に活かすべきものであると思ふのです。伝説であるこ
とは、高学年になれば勿論わかります。わかつて、後
になつてわかつて、もうわけ、学向的でなければなら
ないと言ふことをあまりも窮屈に考へると、かえつて履
きかへる。今日大體そう言う事が多いのです。合理主
義、形だけの合理主義の行き過ぎが多い事を痛感してお

るのであります。近頃東京などでも、新住居表示制度と
言うのがあつて、何か新しくみんな町名を変えて何丁目、
何番地何号と言うようにして、そうすれば、郵便配達夫
が都合がいいと言う事らしいのですが、これなどは由緒
ある町名をどんどん抹殺して、数字ばかりにする。これ
は非常に合理的のようでありましかれども、数字と言う
のは向う易いもので、一つ間違つともうわからないの
です、そう言うように、かえつて不便な事になる。メー
トル法の実地につてその部類で、変な合理主義でありま
して、かえつて実質上、不合理じゃないかと思ふんです
が、そんな事を言つても仕様がありませんが、そう言う
ように、行き過ぎが多過ぎる、形式オンリーの合理主義
が過ぎると言う事を私は感じます。

才三は、日本文化と伝統です。その良いところを認識
する、日本文化と伝統に誇りを持って、国を愛する心を
養はねばならない。これは大事な事であると思ふので
あります。愛国心を此頃は道徳科で教えるのでありま
すけれども、それよりも矢張り、歴史上の具体的な事
実によつて教える事が一番有効である。これは別に説
教として教える必要はないので、事実として、日本文
化のよいところ、伝統のよいところを事実として教
えれば良いわけがあります。何が良いか、これは人
によつて見方はありましかうが、私は矢張り、日本文化
の良いところは、外国文化を素直に受け入れて、それを第

に消化して自分の栄養にして置く、そう言う旺盛な力の事であると思う。これはもう日本文化の最も特色とするところであらうと思います。同時にその伝統が矢張り、常に保存されている、古いものが大事に保存されている、一方に於て新しいものが受け入れられているが、同時に受け入れる主体性は常に古いものが核心となつて残っている、そう言う新旧のうまい取り合われ、その点が日本文化の美点である、伝統の誇りとすべきところであると考へておるのであります。以上申し上げたような事によつて、歴史教育は大いに考へて、改善すべきところは改善すべきものであると思ふのであります。

今日この国の歴史の教科書を見ましても、自分の国の良いところを誇大に述べて、常に自分の国の正当を主張していないものは無いのです。特に中共・ソ連に於て蓋さしいのであり、これらは特殊な国柄でありますから、我れ我れから見ても行き過ぎの点もありますけれども、日本ほど自分の国の悪い事を上げて、そして悪るかつた、悪るかつたと言つて、卑下屈從の歴史教育を行なつて来た国はないと、思はれます、これを少なくとも正当なところまで持つて行く必要が、どなたが考へられてもあると思ふのであります。

今日割りと文化財の保護などと言う事に就いては、関心が高まっています。この点に就いては、不思議に拳党一致の感がありまして、先年、平城京の跡が近畿鐵道の

車庫に買収されようとしましたが、大変な問題になりました。国会でも拳党一致でこれを保存すべきだと言う委員會が出来ましたが、この時には、自民党・社会党・共產党の方までもが、一緒に賛成されて、私は公聴會に呼ばれて行つて大いに感激しましたが、こう言う点に就いて大変高まっているわけですから、今度の歴史風土保存と言う事も、かなり超党派的に進められるようであります。段々そう言う氣運になつて来ているようですから——これは物に就いてですが——、歴史上の心懸えに就いても、一致した方々が出て来る事を期待するわけです。これは早急には行かないと思いますが、徐々にそうなるべき事を私は期待したいと思ふのであります。

大変のまらないお話をしましたが、是れを以て私の話を終る事にします。